

作業療法士教育において「作業」をいかに伝えるべきか

西方 浩一

文京学院大学 保健医療技術学部 作業療法学科

要旨

本稿は、今後の作業療法教育の中で、「作業」の捉え方をどのように学生に伝えることが望ましいのかの示唆を得ることを目的に「作業」や「基礎作業学」について文献レビューを行った。「作業」は「活動」や「作業活動」など類似した言葉があるが、今後は「作業」に用語を統一すべき考えや、万国共通の定義の作成が望まれている。また作業の捉え方は、手段としての作業から対象者にとっての目的や意味を付加した作業の概念が定着してきている。作業を伝える役割を持つ基礎作業学は、手段的作業の技術的な側面から、作業そのものの分析に重きを置くようになっている。また作業に焦点を当てた学問領域として作業科学が発展し、世界標準の教育基準にも盛り込まれている。しかし、「作業」の教育方法にまで言及している研究は少なく、今後はどのように学生に作業を伝え、理解を促進すべきかが課題となる。

キーワード

作業、作業療法教育、基礎作業学、作業科学

1. はじめに

作業療法とは「作業」に焦点を当て、「その人にとって意味がある作業ができるようにすること」及び「作業を用いた介入手段」を主とする職種である。この作業療法において中心概念¹⁾である「作業」は様々な定義がなされている。しかしその不明確さゆえに、長年に渡り議論、提案が繰り返されている²⁻¹⁰⁾。この「作業」を伝えるべき役割の多くを担っている教科は「基礎作業学」⁶⁾である。

現在の作業療法教育は、世界作業療法士連盟(WFOT)の最低基準の緩和化、作業療法教育の大綱化などそれぞれの国、養成校の力量にゆだねられている現状にある。市場原理に基づけば、学校も作業療法も淘汰される時代を迎える恐れがあり、作業療法教育では核を押さえつつ、時代の要請を受けとめて取り組むことの必要性がある¹¹⁾といわ

れている。

このようなことから、作業療法教育において効率的にしかも学生が十分に理解できるように「作業」の教授が求められている。

本稿では、その「作業」の捉え方と「基礎作業学」の内容の変遷をたどり、今後の作業療法教育の中で、「作業」をどのように学生に伝えることが望ましいのかの示唆を得たい。

2. 「作業」とは

2.1 「作業」の不明確さ

作業療法において、作業の種類は日常生活活動、仕事・生産的活動、遊び・余暇活動のように大きく分類¹²⁾され共通の理解となっている。しかし作業療法の「作業」は、

介入手段として使用される際には、定義、基準が曖昧な状況で「活動」、「作業活動」、「作業」などの用語が使用されている。これらが日常的に使用されている理由は、「作業」を手段として用いる場合に、対象者が実行している「作業」を「行為」、「行動」、「形態」として示すには不十分であること、また、「作業」はあまりに日常の生活と関わりが深くその要素が多いこと^{4,13)}にあると言われている。

「活動」は、火山活動や分子活動などの使用にみられるように、活動するものにとって意図や意味が存在する必要はない限局した使用⁷⁾から、手工芸の意味合い、さらに人間の行動範囲までを含み使用されている¹⁴⁾。「作業活動」は、「作業」を構成している概念であり、作業療法の中で用いている活動のすべてとして使用されている¹²⁾。

「作業」は、元来よりより深く、広く捉えるべきものと考えられてきた¹⁵⁾。しかし、還元主義の影響や医療の中で存在を明確にするため、作業の捉え方は一時、限局した機能的な治療手段としてしか捉えられない時代があった。その後、先人たちの様々な実践や研究を重ね、作業本来のもつ意味である、人が日々行う活動として捉えるように立ち戻ったと思われる。

次に日本における「作業」の定義を表1に示す。日本の作業療法士協会は「作業」という用語は一般的に労働使役や生産のイメージを持たれる危険があるとの意見から「作業活動」を用いている¹⁾ことから「作業」を定義していない。しかし鷺田¹²⁾、山根¹³⁾、一原¹⁶⁾は「作業」を生活を構成するもの、近藤⁷⁾は意味ある活動として定義している。

海外においては「活動」や「作業活動」の用語はなく、「作業」に関して様々に定義されている。ここ20年の「作業」

の定義を表2に示した。鷺田¹²⁾のように生活を構成するものとするだけでなく、近藤⁷⁾のように意味ある活動とするものが13定義中8種類である。「作業」の持つ意味は「人が生活の中で行う様々な活動」から変化して、その人にとっての意味をも内包する包括的な概念に収束している。

以上のように様々な「作業」に関連する用語すべてを「作業」に統一すること^{12,17)}、定義も万国共通のものとして作りあげることが、「作業」を中心概念とする作業療法には極めて重要となる。さらに、これらは、作業療法理論の前進に影響する⁵⁾ため臨床実践の向上も期待できる。また、これらにより、作業療法教育において「作業」を教授するための方法の検討を容易にできると考える。

2.2 意味のある作業

Trombly^{18,19)}は「作業機能モデル」で、「作業」には2種類(表3)あることを提案した。1つは「目的としての作業」で学習すべき目標としての作業である。これは「生活を構成する作業」とも捉えることができ⁶⁾、作業することが生活の一部として溶け込んでいるような作業である。もう1つは「手段としての作業」で治療的变化をおこす媒体としての作業である。これまで作業療法においてクライアントのある特定の機能改善を目的とし、用いられた手工芸、ゲーム、スポーツなどがこれに該当する。

また、Fisher^{18,20)}は介入方法の観点で「作業」をエクササイズ、人工的作業、治療的作業、適応・代償的作業の4種類(表4)に分類している。作業療法では、治療的作業や適応・代償的作業を強調すべきとしている。治療的作業とは、本物の物品を用い環境もできるだけ自然な形で実

表1 「作業」と「作業活動」の定義および使用方法

	作業	作業活動
日本作業療法士協会	定義なし	定義なし (日常活動の諸動作、仕事・遊びなど人間の生活全般に関わる諸活動 ⁴³⁾)
鷺田 (1990)	肉体または精神を通じてある具体的(物理的・生理的または心理的)結果を算出すること	定義なし
近藤 (1997)	全ての人の生活の中に満ちている活動であり、文化的、個人的に意味ある活動	定義なし
鷺田 (1999)	作業とは生活を構成しているもので、身体と精神を通じて物理的、生理的、心理的、社会的、文化的結果を生み出すこと(作業活動の総称として使用する)	定義なし (作業療法で用いる活動という意味で使用する)
一原 (2002)	環境との相互作用の中で個人が脈々と培ってきた生活を構成する行為	定義なし
山根 (2005)	ひとの生活や一生を構成するすべての行為、行動の形態	ひとが作業をおこなうこと

()内は使用のされ方と、定義づけはされていないが使用されている文章を記した

施しながら機能障害の回復を図るものである。また、適応・代償的作業は、作業遂行自体を改善することを目的に自助具や、他の方法などを提示するなど社会的環境を調整することである。治療的作業や適応・代償的作業のグループとエクササイズ、人工的作業のグループの大きな違いは、目

的の設定者がクライアントであるかという点と、クライアントにとって意味があるかどうかである。

以上のように、作業は、目的、意味が付加されることでより治療的な価値を見出すことができる。このように「作業」が明確になると、作業療法士の役割は諸機能に注目し、

表2 作業 (occupation) の定義

提唱者 (年)	内容
Yerxa,et al (1989)	作業とは、人の行動の継続の中にみられる特定の活動の一群であり (specific “chunks” of activity within the ongoing stream of human behavior), 文化の語彙の中で名付けられる (named in the lexicon of the culture).
Clark,et al (1991)	作業とは、文化的個人的に意味を持つ活動の一群 (chunks of culturally and personally meaningful activity) で、文化の語彙に名付けられ、人間が行うことである。
Christiansen (1991)	作業とは、活動や課題や役割をしっかりと行うこと全般を指す言葉である (a general term that refers to engagement in activities, tasks, and roles).
Wilcock (1991)	作業とは、人の経験の中心であり (a central aspect of the human experience), 現在使われている給料のある仕事という意味以上のものである。
Kielhofner (1995)	作業とは、物理 (身体) 的および社会的世界で、活動したり行ったりすることである (action or doing in the physical and social world).
カナダ作業療法士協会 (1997)	作業とは、日常での活動や課題の集まりで (groups of activities and tasks of everyday life), 名付けられ、組織化され、個人と文化によって価値と意味が与えられたものである (named, organized and given value and meaning by individuals and a culture).
アメリカ作業療法会 (1997)	作業とは、日常を通して人がしっかりと行う活動で (activities people engage in throughout their daily lives), 時間を充足し、人生に意味を与えるものである (fulfill their time and give life meaning).
McLaughlin (1997)	行動 (action) が作業になるのは、① 個人がしていることを認め (perceived by the individual as “doing”), ② 個人が決めた目標に向かい (directed toward a goal or goals which can be identified by the individual), ③ 個人にとって意味があると同時に、その人が所属する文化にとって意味があり (meaning for the individual and additionally for the culture within which the individual participates), ④ 反復する (repeatable) 場合である。
Crabtree (1998)	作業とは、意図的な人間の行動 (intentional human behavior) で、自己維持や家族・地域でのアイデンティティといった要求を充足するだけの数と種類で構成されている。
Yerxa (1998)	作業とは、自分から始め、自分で方向付ける活動で (self-initiated,self directed activity), 自分にとって何かを生み出し (楽しみも含む)、他者に貢献するものである (productive for the person, even if the product is fun, and contributes to others).
Crepeau (2002)	作業とは、時間を占有し人生に意味を与えるすべての活動である (all of the activities that occupy people’s time and given meaning to their lives).
WFOT (2002)	人が自分の文化で意味がある行うことのすべて (all the things that people do that are meaningful within their culture) である。
アメリカ作業療法協会 (2002)	カナダ作業療法士協会 (1997) の定義を引用

文献4より引用

表3 手段としての作業と目標としての作業

	手段としての作業 (occupation-as-means)	目標 (目的) としての作業 (occupation-as-end)
目的性 (purposefulness)	能力や潜在能力を (全体として働くように) 組織化する。例えば動作, 認知, 知覚。	潜在能力や能力を活動・課題・役割へ組織化する。人の態度・日常・人生を組織化する。
意味性 (meaningfulness)	治療的作業を行うことに動機を与える。	活動・課題・生活役割を行うことを動機づける。
効果 (effect)	課題が達成することを要求する。作業は潜在能力と能力を回復させる。	適応的もしくは教育的作業は生活役割を構成する活動や課題を回復させる。

文献18より引用

表4 OTが使用している一般的な介入方法（クライアントが従事している活動別分類）

	活動の特徴	活動の目的・目標の主な設定者	使用物品や環境	クライアントにとっての生活における意味	焦点
エクササイズ	機械的に繰り返す訓練や練習をする	OT	作業遂行と関係なし	なし	機能障害の回復
人工的作業	目的を人工的に付加した訓練や人工的な要素をもつ作業をする	OT	目的を付加した活動：使用物品は人工的で環境もクライアントの文脈と関係なし 人工的要素をもつ活動：使用物品は本物	ほとんどなし 意味はOTによって人工的につけられたもの	機能障害の回復
治療的作業	クライアントの作業への主体的参加	クライアント	本物の物品を用い環境もできるだけ自然で文脈をもつ	あり 意味はクライアントが特定	機能障害の回復
適応・代償的作業	クライアントの作業への主体的参加	クライアント	本物の物品を用い環境もできるだけ自然で文脈をもつ	あり 意味はクライアントが特定	作業遂行それ自体の改善

文献 20 より引用

その要素を改善できるようにするだけでなく、クライアントにとっての「目的」や「意味」を持つ「作業」を提供することが必要となると考えられる。

3. 基礎作業学の変遷

3.1 基礎作業学に関する書籍

「作業」を伝える役割の多くを担っている「基礎作業学」が誕生したのは「日本作業療法士協会の長期活動計画について」（1985年5月30日）の答申による。これにより初めて「基礎作業学」、「作業病理学」、「作業適応学」などの「作業」に関する教科名が登場する。これらは、作業療法教育を規定する「指定規則改正」（1988年）の際に、「基礎作業学」、「作業療法評価学」、「作業治療学」として法的に認知された¹⁾。

この答申後から現在に至るまで5冊の「基礎作業学」に関する書籍^{15, 21~24)}（表5）が出版された。「作業その治療的応用」、「基礎作業学第一版」では、作業技法として扱われていた各作業種目、例えば木工や革細工、籐細工などの作業そのものの実施方法、治療として用いる際の身体的側面や精神的側面などについて記された部分が多く占めていた。これらの内容は、Tromblyの言う「手段としての作業」が焦点に当てられている。

しかし「基礎作業学第二版」、「人と作業・作業活動第二版」、「基礎作業学」では、作業そのものの分析に多く割かれおり、内容は変化している。

3.2 基礎作業学に関する論文

学術論文においてはCiNii（国立情報学研究所論文情報ナビゲーター）を使用し、「基礎作業学」を検索用語として検索した結果、37件が該当した。検索されたもののうち、論文は12件、学会抄録集は8件であり、著書は17件であった。論文の内訳は、基礎作業学に関する論考が5件、基礎作業学実習に関する論文が4件、基礎作業学授業紹介1件、総説1件、研修記1件であった。

基礎作業学の総括的解説及び提言が述べられた論考には「基礎作業学を考える」がある。これは作業療法ジャーナルに1997年に5回にわたり連載された。冒頭の論文において基礎作業学は、作業に関する知識や経験を蓄積する領域として、作業に関する最新の知見を包含することができるとしながら、基礎作業学の課題として、作業分析の臨床での有効利用や人と作業を切り離して考えることの難しさ、作業を研究対象として捉えることの難しさが提示された⁶⁾。Tromblyの言う「手段としての作業」を想定した作業分析の問題点として、「作業そのものの分析」は比較的形が整っているが、「クライアントの問題点に対応するための分析」や「クライアントと作業の調和の分析」が未整理な状態であることを指摘している。またTromblyの言う「目的としての作業」についても、分析可能な方法が必要なこと、作業がクライアントの発達や価値観の形成に対して影響を及ぼすこと、クライアントにとって、ある特定の作業が人生や生活においての意味を知ることが必要である⁷⁾と記している。「意味ある作業」について焦点をあて「作業」を分析することが課題になっている。

基礎作業学実習に関する論文は、手段的作業の臨床で

表5 基礎作業学教科書の目次

編著者	鷺田孝保著. 日本作業療法士協会編 (1985)	鷺田孝保著. 日本作業療法士協会編 (1990)	鷺田孝保著. 日本作業療法士協会編 (1999)	山根寛著. 鎌倉矩子, 山根寛, 二木淑子編 (2005)	編集: 小林夏子 / 福田恵美子 (2007)
書名	作業その治療的応用	基礎作業学第一版	基礎作業学第二版	人と作業・作業活動第二版	基礎作業学 (医学書院)
目次抜粋	第I部 総論 1. 作業療法と作業 2. 治療過程 3. 教授法 4. 作業研究 第II部 各論 1. 作業 2. 障害 第III部 症例研究 1. CVA～上肢機能回復と作業応用の可能性について 2. 脳性麻痺 3. 精神分裂病 4. 痴呆患者に対する作業療法	第1章 基礎知識 1. 作業学とは 2. 作業の分類 3. 人間と作業 4. 文化と作業 5. 作業分析 第2章 基礎技法 1. 作業の分析 2. 指導法 第3章 作業技術	第1章 作業療法における作業 第2章 作業学と作業療法 第3章 作業分析と作業構造論 第4章 包括的作業分析の方法 第5章 限定的作業分析の方法 第6章 作業学習と指導法 第7章 作業の治療的応用	1. 作業・作業活動とは 2. ひとと作業・作業活動 3. 道具としての作業・作業活動 4. 作業・作業活動と生活機能 5. 作業分析とは 6. 一般的作業分析と試み 7. 限定的作業分析と試み 8. 作業・作業活動をもちいる 9. 未完成の章	序章. 基礎作業学を学ぶ皆さんへ 第1章 基礎作業学と作業療法 第2章 技能別作業分析の理論と方法 第3章 分野別作業分析と適応

の使用頻度を学内授業との関連²⁵⁾、についてみるものや、学生が実施する作業活動をフロー概念と Locus of control および興味の主観的観点からの分析²⁶⁾ をしているものであった。野田ら²⁷⁾ は学生が臨床実習中に使用した作業活動の調査の結果、精神分野では園芸や陶芸などのような生産的・職業的作業活動と、散歩などの趣味的・レクの活動が多く、身体障害分野では、ペグやサンディングのような基本的動作訓練活動が多かったと報告している。ここでの生産的・職業的作業や趣味的・レクの作業、基本的動作訓練的活動はいずれも、「手段としての作業」である。学生は、臨床実習中に経験する作業を手段として捉えていることの現れであることがわかる。さらに野田ら²⁸⁾ は臨床実習中に使用する作業活動の経年変化についての報告で、身体障害分野においては、手工芸類や趣味的・レクの活動の使用頻度が減少していることについて触れ、現場での手段的作業の使用頻度が減ることについて危惧されると述べている。また学内実習と臨床実習での経験についての報告では、切り絵や木工、籐細工などの学内実習で習得したもの以外の作業活動を使用した割合が有意に多く、理由として「適切なものがない」、「対象者の受けがよくなかった」などが多かったことを指摘している²⁹⁾。作業療法で対象となる人々は千差万別である。それぞれの人生を様々な形で生きてきており、様々な作業を積み重ねてきた作業歴を持っている存在である。しかし学生は限局した手段としての作業

に偏る傾向にあり、個別性を重視し、クライアントにとって意味のある作業を提供できるようになるには学内授業、実習方法にも検討の必要性があると考えられる。

浅井⁹⁾ は、手工芸を例にとり、作業技法は、従来の自然科学をもとにした証明方法だけでなく、社会学、人類学、教育学、芸術などの理論を取り入れた証明をしていく必要があると述べている。また長谷¹⁰⁾ は、作業学を作業行動理論の誕生から人間作業モデル、作業科学の発展まで経時的に捉え考察した。これら2論文は、作業理論に基づき「作業」を分析することを提案している。

このように日本においては、「作業」を伝えるために必要な内容の焦点は「手段としての作業」のみから脱却したが「目的としての作業」にはまだ十分に焦点をあてられておらず、「作業」を治療的要素として分析する方法論にあてられている。また、学生の作業の受け取り方や研究においても同様な傾向が伺える。

これに対して、アメリカでは「意味ある作業」の遂行に困難さを抱える作業療法の対象を障害者だけでなく高齢者とし、「目的としての作業」の提供から「健康で満足できる自立した生活のための作業」の提供に発展している。1997年 Zemke⁸⁾ は作業を基礎とした作業療法プログラムの知識を使用し、健康高齢者に対する取り組みについての研究を日本に紹介している。これら一連の研究は「The Well Elderly Study」と称されおり、これらは後に述べる

作業科学研究である。

4. 作業療法士教育における「作業」の教授内容と方法

4.1 学生の捉える作業

学生の「作業」の捉え方については、初期は「手段としての作業」と捉え、年次に従いその偏りが失せ、「対象と目的と手段」の三位一体の捉え方に変化し、その概念形成の契機は机上学習よりも実習、特に臨床実習の及ぼす影響が強い³⁰⁾とされている。

臨床実習の特性は、学生が実際にクライアントの作業の目的を考え、作業している姿に接し、クライアントの作業に対する思いの語りを聞くところにある。学生は個別の「作業」に向かい合う機会を得ることで概念形成を促進するのかもしれない。それを踏まえれば学内では、実際にクライアントに接する機会がないことを補う手段として、擬似的に自らの作業について考えることや身近な人と作業の関係について考察することなどを通し、「作業」に向き合う機会を与えることで作業の概念を広げる工夫ができるのではないかと考える。

4.2 作業の意味を伝える授業

吉川³¹⁾は、作業の意味（「目的としての作業」）や治療的価値の学習を目指す授業内容について報告している。この授業の主な目標は、① 作業の概念を理解する、② 自己の作業を考察する、③ 作業の分析方法を知る、④ 作業療法での作業使用例を説明する、である。また授業内容は、① 作業歴評価、② 作業体験の考察、③ 障害を持つ人の視点からの書を読む課題を通じて作業的存在としての人を理解する、④ 治療的作業について考えるために手工芸種目の作業分析を実施する、であった。自分自身を振り返る作業歴評価や、作業体験を考察することなどで、作業の定義や理論的枠組みの理解が深まることや、治療的作業を伝えるためには、開講時期や他科目との連携を考慮する必要がある

あると述べている。

さらに作業に焦点を当てた学術領域の発展に伴い、その成果を教育に取り入れていく必要があると述べ、後に作業科学を基礎科目として紹介し³²⁾教科書として出版している³³⁾。

4.3 国内と世界のカリキュラム

日本作業療法教育最低基準（2003）において、基礎作業学は、その概念を理解するものとして、作業の概念、人と作業の関係、作業の分析と適応を教育内容の例示としてあげている³⁴⁾。また世界作業療法士連盟（WFOT）³⁵⁾の最低基準では、人間—作業—環境と健康との関係について記され、作業の項目では、作業を分析し、適応し、段階づける技能、それに影響を及ぼす作業遂行と環境要因の分析に関する技能の重要性が指摘されている。

日本の作業療法の受験資格が得られる大学52校のうち検索エンジンにてカリキュラムの詳細が検索できたのは39校であった（表6）。「作業」を教授している教科名は「基礎作業学」、「作業学」、「作業活動学」などであった。「基礎作業学」を用いた大学は21校があり、「作業科学」という教科名は6校であった。

4.4 作業科学の発展の影響

作業科学は「作業」に焦点を当てた研究領域、学問である。作業科学とは、「作業的存在としての人間を研究する新しい社会科学の一分野である」とされ、社会学が社会組織に焦点を当てるのと同様に作業科学では作業に焦点を当て、作業の形や機能、意味を研究する学問といわれている³³⁾。国内最初の教科書、基礎作業学第一版では、海外の動向として、作業科学について触れている¹⁾。日本では「作業学」を作業療法実践の学として位置づけ、「作業科学」という名称を使用するまでには至っていない。しかし、教科名として用いている大学は6校と少ないが現れている。

一方、海外では、作業科学の学問が体系的となり発展は世界的にも広がり³⁶⁾を見せており研究が積極的に積み重

表6 作業療法養成大学における「作業」に関する科目名

科目名	学校数
基礎作業学	21
作業学	7
作業科学	6
作業活動学または作業活動演習	2
不明	3

※国内の作業療法養成校大学52件のうちHP上にカリキュラム概要を掲載している39件を対象とした（2008.11.14付）。

ねられている。また、作業療法士教育では、作業療法士教育の最低基準 2002 年改訂版（世界作業療法士連盟）において、人間作業モデル、カナダ作業遂行モデル、人間-作業-環境モデル、オーストラリア作業遂行モデル、日本の作業療法の川モデル、その他の地域の理論、さらに作業科学の知見などは、人間を作業の視点で見るときに必要な理論であるとされている³⁵⁾。また、ヨーロッパ高等教育機関作業療法ネットワーク (ENOTHE)³⁷⁾ では、その中のプロジェクトの一つに作業科学に関するプロジェクトが生まれ、これまでの作業科学論文に関するレビューを行いながら、今後の教育にどのように組み込むかを検討している。さらに作業療法の教科書で世界的に歴史のある Willard and Spackman's Occupational Therapy³⁸⁾ の最新刊では、その冒頭の章において作業科学は作業療法の基礎として記述されている。これは、作業科学が作業療法士に受け入れられ、作業療法にとって必要な学問領域であり、体系的に整えられたことを示している。これらのことから作業科学の知見を教育の中に用いることの重要性は明白であると考えられる。

4.5 今後の作業療法教育における「作業」の伝え方

日本の作業療法教育において「作業」の教授の中心は「基礎作業学」であり、その内容は、「目的としての作業」、「意味ある作業」の理解、そしてその分析方法である。またそれらに影響するものとして、今後は作業科学の内容および、得られた知見の紹介も必要になると考えられる。作業的存在としての人間の研究から得られた知見は、作業療法にとって作業を通した人の見方や考え方を育てるのに役立つと考える。さらに、作業科学を学ぶことは作業療法士としてのアイデンティティ構築に影響があり³⁹⁾、学ぶ時期を考慮しての「作業」の教育方法の必要性も報告されている^{40, 41)}。作業の知見を教育で教授するには単一の教科のみでは難しく、カリキュラム全体を通して作業に焦点を置いた形にしていくことも必要であると言われている⁴²⁾。

5. おわりに

作業療法教育の中で「作業」をいかに伝えるべきかの示唆を得ることを目的に、作業の捉え方や基礎作業学について概観し述べてきた。作業の概念は広がりを見せており、今後も作業に焦点を当てた研究・実践の知見を取り入れながら教育をすることが重要であると考えられる。しかしそれらを学生に教授する方法についての研究は散見するのみであり今後の課題であると言える。

引用文献

- 1) 鷺田孝保. 基礎知識. “日本作業療法士協会編. 基礎作業学第一版” 東京: 協同医書出版社. 1990. p.1-89.
- 2) 金子翼. 作業分析-1-作業分析概論. 作業療法ジャーナル. 1991; 25: 119-124
- 3) 生田宗博. 作業分析-2-動作学的観点から. 作業療法ジャーナル. 1991; 25: 208-215.
- 4) 吉川ひろみ. 作業療法における「作業」の変遷 (特集「作業」再考). 作業療法ジャーナル. 2005; 39: 1160-1166.
- 5) Clark, Florence A. 佐藤剛. Iwama, Michael. 万国共通の作業定義の構築に向けて—作業科学の視点より (特集 / 理論からみる「作業」研究の動向). 作業療法ジャーナル. 2000; 34: 9-14.
- 6) 吉川ひろみ. 基礎作業学を考える (1) 作業療法学の構造と基礎作業学—研究・臨床・教育の視点から. 作業療法ジャーナル. 1997; 31: 791-794.
- 7) 近藤知子. 基礎作業学を考える (2) 基礎作業学と作業分析. 作業療法ジャーナル. 1997; 31: 875-878.
- 8) Zemke, Ruth. 基礎作業学を考える (3) 作業科学および作業療法における文化的話題. 作業療法ジャーナル. 1997; 31: 962-967.
- 9) 浅井憲義. 基礎作業学を考える (4) 基礎作業学と作業技法—手工芸をとおして考える. 作業療法ジャーナル. 1997; 31: 1045-1049.
- 10) 長谷竜太郎. 基礎作業学を考える (5) 作業療法の実践における基礎作業学の応用—作業研究の影響と成果. 作業療法ジャーナル. 1997; 31: 1129-1133.
- 11) 宮前珠子, 山崎せつ子. 作業療法教育におけるこの10年と今後. 作業療法ジャーナル. 2006; 40: 141-150.
- 12) 鷺田孝保. 作業療法における作業. “日本作業療法士協会監修, 鷺田孝保編. 基礎作業学第二版” 東京: 協同医書出版社. 1999. p.1-14.
- 13) 山根寛. 作業・作業活動とは. “鎌倉 矩子・山根 寛・二木 淑子編. ひとと作業・作業活動第2版” 東京: 三輪書店; 2005. p.1-24.
- 14) 日本作業療法士協会. 作業療法関連用語解説. 東京: 協同医書出版社; 1996.
- 15) 日本作業療法士協会. 作業とその治療的応用. 東京: 協同医書出版; 1985.
- 16) 一原里江, 小川小枝子, 青山宏, 佐藤剛, CLARK Florence A.. 作業的存在としての対象者を援助することの意味: 慢性期精神分裂病の一症例を通じて. 作

- 業療法. 2002; 21: 463-471.
- 17) 鷺田孝保, 澤俊二, 中田真由美, 埜崎都代子, 丹羽正利, 池田恭敏. 作業の人に与える影響. 茨城県立医療大学紀要. 1996; 1: 33-38.
- 18) 市川和子, 上松剛. 入門講座 活動分析 (2) 作業 (活動) の分類と選択のポイント. 作業療法ジャーナル. 2004; 38: 883-890.
- 19) 吉川ひろみ. 学びたい世界の作業療法 Catherine A. Trombly Occupation: Purposefulness and meaningfulness as therapeutic mechanisms 作業: 治療メカニズムとしての目的性と意味性. 作業療法ジャーナル. 2004; 38: 144-147.
- 20) 齋藤さわ子. 学びたい世界の作業療法 Anne Fisher: Uniting Practice and Theory in an Occupational Framework. 作業療法ジャーナル. 2003; 37: 410-414.
- 21) 日本作業療法士協会. 基礎作業学第一版. 東京: 協同医書出版社; 1990.
- 22) 日本作業療法士協会監修, 鷺田孝保編. 基礎作業学第二版. 東京: 協同医書出版社; 1999.
- 23) 鎌倉矩子・山根 寛・二木淑子編. ひとと作業・作業活動第2版. 東京: 三輪書店; 2005.
- 24) 小林夏子, 福田恵美子. 基礎作業学. 東京: 医学書院; 2007
- 25) 松房利憲, 徳江与志子, 山勝裕久, 小林夏子. 基礎作業学技法の構築: アンケート調査より. 群馬大学医療技術短期大学部紀要. 1995; 15: 127-132.
- 26) 石井良和, 石井奈智子, 石川隆志. 基礎作業学実習における作業活動の主観的特性~フロー概念, 統制の所在, 興味の変化からみた作業活動~秋田大学医学部保健学科紀要. 2006; 14: 54-61.
- 27) 野田和恵, 古川宏. 臨床実習で使用される作業活動: 臨床実習学生対象調査による. 神戸大学医学部保健学科紀要. 2001; 17: 131-135.
- 28) 野田和恵, 古川宏, 永井栄一. 臨床実習中の作業活動の経年的変化について. 神戸大学医学部保健学科紀要. 2002; 18: 137-142.
- 29) 野田和恵, 古川宏. 基礎作業学実習の種目調整の必要性について: 臨床実習と学内実習の連携をめざして. 神戸大学医学部保健学科紀要. 2003; 19: 101-107.
- 30) 福意武史, 田中順子. 学生は作業をどのように理解しているか—作業療法において作業の意味するもの—リハビリテーション教育研究. 1999; 4: 12-14.
- 31) 吉川ひろみ, 上村智子, 古山千佳子. 作業の意味と治療的価値を学習する基礎作業学の授業内容の紹介. 作業療法教育研究. 2000; 1: 19-24.
- 32) 吉川ひろみ. 作業療法教育における基礎科目としての作業科学. 作業療法. 2004; 23: 587.
- 33) 吉川ひろみ. 「作業」って何だろう—作業科学入門. 東京: 医歯薬出版; 2008.
- 34) 社団法人日本作業療法士協会. 作業療法士教育の最低基準. 2003. 10
- 35) 世界作業療法連盟. 作業療法士教育の最低基準. 2002. REVISED MINIMUM STANDARDS FOR THE EDUCATION OF OCCUPATIONAL THERAPISTS 2002
- 36) Molke DK, Laliberte-Rudman D, Polatajko HJ. The promise of occupational science: a developmental assessment of an emerging academic discipline. Can J Occup Ther. 2004; 71: 269-80.
- 37) ENOTE ヨーロッパ高等教育機関作業療法ネットワーク (ENOTHE) HP. <http://www.enothe.hva.nl/cer/os.htm>. (2008.9.12付)
- 38) Elizabeth Blesedell Crepeau, Ellen S. Cohn, Barbara A. Boyt Schell, Willard and Spackman's Occupational Therapy 11th. Lippincott Williams & Wilkins. 2008
- 39) Kondo. T., Ohmatsu. K., Nishikata. H., Funayama. T.. Building Confidence and Identify as Occupational Therapists: The Influence of Occupational Science Concepts on Japanese Occupational Therapy Students. 4th Asia Pacific Occupational Therapy Congress. 2007. June, HongKong. (4th Asia Pacific Occupational Therapy Congress abstract CD-ROM)
- 40) 西方浩一, 近藤知子. 作業療法学生に対する「作業科学」授業の反応と影響. 第41回日本作業療法学会. 2007, 6月, 鹿児島. (第41回日本作業療法学会誌 CD-ROM)
- 41) 西方浩一, 近藤知子, 大松慶子. 作業科学が学生に及ぼす影響: 学年別に見た授業の反応から. 第42回日本作業療法学会. 2008. 6月, 長崎. (第42回日本作業療法学会誌 CD-ROM)
- 42) Wood W, Nielson C, Humphry R, Coppola S, Baranek G, Rourke J. A curricular renaissance: graduate education centered on occupation.. Am J Occup Ther. 2000; 54: 586-97.
- 43) 日本作業療法士協会 HP. 作業療法の紹介ページ. <http://www.jaot.or.jp/work.html> (2008.9.12付)

How should we teach “occupation” in Occupational Therapy Education

Hirokazu Nishikata

Department of Occupational Therapy, Faculty of Health Science Technology,
Bunkyo Gakuin University

Abstract

This paper is for people who wish to teach a student the meaning of “occupation” and how to in future occupational therapy education to get others to understand this concept. When I performed a literature review about “occupation” and “studying occupation,” “occupation” had a meaning similar to “activity” and “occupational activities.” The idea that should be defined as “occupation,” and the creation of a universal definition, are desired. Moreover, the concept of work, and how to understand work, adds purpose to a candidate for the work as a means and the meaning is being established. When studying “occupation,” the teacher puts weight on the analysis of the occupation itself from a technical standpoint. Moreover, occupational science develops work as a learning domain on which it focuses, and it is incorporated into the global educational standard. However, little research has mentioned even the educational methods of teaching “occupation.” It becomes a subject of how to promote understanding by teaching “occupation” to a student.

Key words —— Occupation, Occupational Therapy Education, Studying Occupation, Occupational Science

Bunkyo Journal of Health Science Technology vol.1: 53-61